

# 會報



号五第年二第

昭和六年六月一日發行

通巻十号

## 春の両神山

四月四日 快晴

早春の朝日ははや中津の谷一ぱいにさしそめて来た。中山一家の入道に別れを付けて案内の黒沢栄一とそこを出たのは丁度六時半だった。弊落の端礼から白井差峠へかゝる峠路は実に急峻を極めて居た。十命と登らないうちに歩度と呼吸とがぢはぐになつてそれを調整するたかに幾度か足を止めぬはならなかつた。が此峠路は去年の秋七十幾歳かの老人が登つていったといふ程ではあるし、又今生きてゐれば八十幾つとかになるといふ中山正則君の祖母さんが、白井差から嫁入に越えてきた程だときかされては勇猛心を奮ひ起さずには居られなかつた。しかも去来の秋奥野、松木の隊が病人を出して引返したといふ因縁付の峠路なのだ。一日の晩の松木の御祝儀酒の案がまだ残つてゐるの、でこんな息がされるのだらうなどと考ながら登つていった。高度の増すにつれて白岳山を始め奥

秩父の山々が指顧の間に望まれた。秩父の里では梅が薫つてゐたがこゝはまだ冬芽だった。散り敷く落葉を踏みしめて峠に着いたのは八時だった。残雪に映さうるほす。固いざらめ雪だ。こゝからは尾根道に一路北上すれば其極まる処こそ宿望の両神山三角点なのだ。尾根道はさして淺つた藪ではないが、よく刈つてあつたし、指導標もよくつけてあつた。尾根の東側には豊富な残雪があつたし、厚く落葉の敷り敷いた尾根道は其落葉の下こそ洩断のなりぬ堅氷で幾度か氷に足を奪はれながら爽状な縦走の旅を續けていった。梵天の頭からの眺望は周囲の樹林を伐り掃つた大にすばりしかつた。照燾する中津川の部落、行舟を威壓する様な妙姿岩の岩壁、其後續いた浅黄の爽やかなカヤトの尾根、しぬじぬ早春山行の幸福を思はずには居られなかつた。梵天の頭から一旦地図の小経の越えてゐる尾根へ又を大峠といつてゐる。まで降つて、再び樹林を介けて登りにかゝる。木つゝ、きが盛に敲いてゐる。経は幾つかの小陸起を越えた後尾根の東側に少し降つてから西をわがけて稍顕着な露岩だつた時に十時半。西に向つて長く城壁の礫に連つてゐる此岩は文字通のナイフリツヂで石灰岩と覺し、根を張つた赤松との調和は実に斬画的風趣だつた。経は此岩の中途から北に向つて梅の密林の

間を急降するのであるが北に面した其斜面は一面の氷で、僅の距離ではあつたが、此降路は相當の緊張を覚えた。降りきつた鞍部をヒゴノタラと呼ぶ。こゝから一路北上する経は了つた梵天岩からほるかに望んだカヤトー短い小径を登つてゆくのであつた。直射する太陽は四月の初とも思へぬ程激しく、早満身の汗である上に、朝からの奮闘は漸く空腹に應えてあえぎ登らねばならなかつた。登りつめた尾根の突端は両神山錫岳の南端に位し三角点迄は尚二三の小突起を越えてゆくのである。がもうそれは一投足の労に過ぎなかつた。十二時十分、遂に宿願の両神三角点に起つた。南天を限る奥秩父の雄峯、其山波を越えて望んだ南アルプスの白銀の様な山容。八岳連峯、稜料、美ヶ原、白飯の浅間山。薄紅の西上州の山々。長大な尾根を引いて秩父盆地に屹立する武甲山、到底歎えつくせない程錯雜紛糾してゐる山波の間に指される小鹿野、間明平、尾内などの部落。又北望すればこれから行かうとする尾根はさながら錫岳の連つてゐるからの様で、少くとも五時頃の悪闘を覚悟せねばならなかつた。一時、楽しい晝食を終り、靴の紐を締め直し、愈々両神山縦走の中心地帯にかゝる。高畑氏の記録、小倉君の實驗談から綜合し相當の危険と通過時間を豫想され此尾根道は、成程多少の難と、特に悪場もあつたが、案内と二

人道中の気軽さもあつた、めか僅々五十分で西岳の頭まで来てしまつた。これは非常な枚獲であつたと同時に前途に対して抱いてゐた多少の不安を一掃し、西岳から八日見山へかけての降路は七十米程の直立的岩峯の下降で、相当緊張味のある岩へツリのあるたにも不拘、樹林を走る若鹿の様に勇躍しつゝ降り且登つた。尾ノ内沢に望む東側はきしりに勝る絶壁であつた。そして豊富な残雪が谷底一杯に白く光つてゐた。渴けは雪にのどをうるほしなながら嶺の耳の様な八日見山の双峯を越え、尚残つたの峯頭を登り、西岳から一時間半で八丁峠まで来てしまつた。それは全く意外だつた。こんなに早く通れるとは思はなかつた。朝出るときの考では早くもこゝで六時にはなる。こゝからはランタンの御厄介になつて八丁峠の雪路を降りぬはなるまいといふ豫想は、一人旅である大に可成な心の重荷だつた。が早降とはいへ三時半といへは陽はまだ高く、鼓鑿の聲も之れから聞えて来るではないか。案内の黒沢も陽のあるうちに中双里へ流れやう。峠の南側の石に風をよけて林みながり、越えて来た両神の錫岳峯をしみとくと眺めた。そして列々両神を完全に越えたと思つた。やがて黒沢には又会ふ日を約して彼は峠の西へ、私は東へ、道を渡する残雪をふみしださながら、登頂を終えたあとの、珍感することのできない朝か

な氣持で峠路を降つていった。何かこう胸一杯にこみ上げて来る感情を聲限り歌つてみたい様な心持で。  
(浩一郎)

春

みな様御無沙汰お許し下さい。歩くともう汗ばむ時候になりました。お愛りありませんか。當方至つて丈夫、毎号御心配に預りました脳も胃もこれ以上悪くなれません。御安心下さい。

春は三笠の山にも四條の大路にもございます。

この前の日曜には赤目と香落溪へ参りました。赤目といへばおかしくても、目黒もあり目黒もあり、学生時分にきまつた日本新百景で始めて知つた事ながら、あれほど人氣のあつた信貴山が来て見れば生駒の裾に小さい丘であつたのに、赤目は仲々よい処でございませう。尤も陰で鬼ますと小経を差し換んで四十八の滝が大きな名札をぶら下げでドウドウ落方て居りますので、これではびつしよりになるだらうと存じましたが、そこはそれ人の生れる前の図で、今は滝の後退作用とか見上げる岩壁が少し濡れてる位のが多うございませう。それでも重なり合ふ葉と水の輝きに何の滝とも分らずにヒヨコ／＼して居りますと、変な男がノツと出て参りましたので何の滝だと聞きますと笑つて答へません。案内と分つて履ふ事にきめましたら忽ち大きな声を張り上げて「正面に見えますのが行者の滝、行者の滝でございませう」とはじめました。香落溪は果仙峽の大きいので、室生寺は山岳宗の名もうれしく、金堂は窓からのぞく暗い中に十ニ神將の端然たる姿も又なく尊いものでございませう。大野寺は川を距てた岩壁に刻んだ四十五尺の彌勒菩薩、名も知れぬ宗人のこの作は川風に揺れて輝く緑の中に静かで、よく見れば流暢な刀法に浮き出たこのふくよかな胸のあたりアテネの香さへ高うございませう。

高いのは家のまわりの蛙の声でございませう。雨の夜は高窓からのぞく前の空地が鏡を張つて、この向ふの一群の貧家のともしびのそれに映る景色つたら。いにしへにはなかつた眺めと存じ雨にならんとおいて居ります。

先づは御無沙汰のお詫びと近況御報告まで。  
(六、五、一七) — バツタ —

旅は上州、<sup>カヘリライゾグ</sup>歸心如矢、狸大盡

第一幕 天神峠

雲助甲、旦那、此処が天神峠で、へい。向ふが幾間様の奥の院、まだ雪が深う御座んすなあ。それにもまるで空が抜けた様な今日の好い天氣。狸大盡、あ、ほんとは好い日和ぢや。下でははく、か、うらんの花盛り。腹の底まで晴れ渡つ

てくるわ。

愛助乙、何でも今日は下の場へ土合の若い衆が三十六人、藝妓衆が十人、お花見に来るとか云ふ噂。嗚かし賑はふことだらう。

愛助丙、時に旦那、今は何刻で。

大 蓋、今は丁度午刻かや、それから奥の院へ廻って水上の宿に暮れの六刻までに行かねば今日中に江戸入りは出来まい。今日歸らねば明日出勤が出来ず、皆勤の御褒美御手当の五十兩がツイになる。何とか急がせざるまい。お、皆の衆、ずんと急いでくりやれ。酒代は存分はづむによつて。

甲、何と旦那は馬鹿に歸りを急がる、噂、それとその筈さ。こちとらと違つて江戸

には奥方様の御持兼ねとある。なあ、相替、旦那が酒代をはづむとよ。一つ威勢よくやつとくれ。

丙、よし来た、合點

(トーンと息杖を入れて)

唄、「西が曇れば、管笠持ちやれ、

可愛い股御は旅の空。

大 蓋、うむ、早く江戸へ歸り度い噂。

(幕)

第二幕 水上の宿、とある居酒屋

愛助甲、旦那、水上へ着きました。随分早く参つ

なとんで。

愛助乙、土合湯松曾とまるで飛ぶ様に参りました。狸大蓋、ア、御苦勞、(へ奥に向つて)

ナア婆さんや、酒があるかい。何。一番安いのでよい。

丙、皆の衆、何もたべずに飲んだがよい。酒は空腹で、草臥れてる必が一番よくきくからのう。

甲、では旦那、遠慮なく頂きます。オヤ、(地酒か知らないが何とスツパイ酒ではないか。

乙、ほんに、筋金入りのおいらの身体でさへ宿酔もしよう云ふ代物だ。

丙、何とか文句を言はずに飲んだり。

狸大蓋、なあに皆の衆、エツクリ、くつろいで心配せずに飲むが好い。此処の勘定は駕籠代の中から差引いてをくで噂。

(幕) ーペンー

山へ此頃はすつかり御無沙汰して了つた。針葉樹会へ入れて戴くのも厚顔ましい位で。除名制度でもあつたらとつくの昔、部から追ひ出されてゐることだらう。二年ばかり前高木さん達との白馬へ登つたのや、磯野やなんかと八峯へ行つたのが最後の憶ひ出だ。それからハッケーで忙しくて仲

仲間暇が出来なかつた。

昔と言つても狸ぢやんの卒業する時分の事だが、高木さんと森竹さんの三人で穿ると融ると、今日の面会はとうだったこうだったと、まるで別人の様に血眼になつて騒いでゐられた。——尤も又は自分か、或は却本人は面白半分だったのかも知れないが、——を見て驚いたものだ。就職といふ奴は恐ろしいものだと思つた。ところが順番が廻つていざ自分の場合となると昔考へた程就職が恐くも見えず例の癖が出てきて暢んびりかまへこんでしまつた。其のお蔭か列頭人並の激入らしい者が出来上つて、のらり／＼と暇潰しに苦勞してゐる。どうも自分は物事を真剣に考へないらしい。此頃ぼんやりながらそれが判つて来た。ひどく痛々さうな事悲しさうな事などはなるべく眼をつぶつて通り抜けようとしてゐるらしい、悪い性質だと思ふが又一方良い性質と無理に考へられないこともない。

今年卒業する仲間中島嘉一郎のゐない事は何といつても一番淋しい。(としを)

時は三陽春、針葉樹会にも亦春が訪れた。高嶺の白雪も溶けて流れて次々の御目出度。誠に目出度い限りだ。春らしいナンセンスが盛んに放出さ

れてる事だらう。

尤も亦共の一つ……人一倍大食のKぢやんか腹を空かして歸つて来るが夕食は何時と九時、其の辛棒は並大抵ではないらしい。いつかなんどは盛んにスキ焼の香を嗅がされた上句いざ食卓について見ると肉の影さえ見当りない、詰問したら焦げついてしまつて苦がくて食べられないから煮て了つたんだとか。皆さん其の時のKぢやんの顔を却想像下さい……だが待てよ、不思議なことがあればあるものスキ焼にかけては其の道の達人、指導を受け度いと思つてるフラウかいくら新婚早々だどで肉を焦げつかせるとはちと度がひどいと思つて探つて見たら何のこつた、肉を煮てフラウを引つ張り出してダンスをしてたんだつてさ、いやはや

——ト——

去年の暮から今年へかけて、全く忙しい日はかり過ぎました。此の三月には関西から九州へ出掛けたのでその間に一日暇を見て悠さんを吹田に訪ねました。電車を間違へて向ふの外札の吹田に下りされたので一里進くも歩かされてすんでの事に断念しやうかと思つてたら偶然熊さんが御歸宅になつた所を見付けて無事訪向の目的を達し、その上五十嵐君にもお目にかかれて、その上両君の奥様、更に御子さん達に追御面会出来たなんて、常

にい、事はして置くものだと悪いました。但しい事は二つとなく、もう一度ゆつくり一箇に晚餐でもしやうかと思つてゐたのも駄目になつて、とうとう九州の石炭山で真暗な所を歩かされて三月一杯を暮してしまひました。山は上へ登るのはいいが中へもどり込むのはあんまりいゝ、氣持ぢではありません。但しコンぢやんの様にお商売柄か或は性来？山の中へもどり込む人に聞けば話は少し違ふかも知れませんが。辨しあんまりこんな事をいふのは止めにしませう。何しろおめで度いのですから。おめで度いと云へば、右を見ても左を見てもおめで度いことばかりですわね。御無沙汰のおわびに駄筆を走りせて以上。

— 龜 —

記 録

五月三日—四日 谷川岳西黒沢、園山徳三郎、村尾金二、近藤恒雄、磯野計藏、

五月十五日 叡山 中川孫一

五月廿三日—四日 大菩薩嶺柳沢峠、松木謙三、園山徳三郎、

消 息

五十嵐教馬、転居、大阪府三島郡吹田町栄町一、二一七、

横倉吟三郎、勤先、不動野金銀行日本橋支店

宇佐美敏夫、勤先、東京火災保険株式会社営業部

只今外勤中ださうで先輩同輩から加入紹介等の御援助を切望して居ります。

河相薫、勤先、神戸市伊藤町二九兼松商店、神戸市養老町二丁目八ノ三中野方、

磯野計藏、自営、銀座明治屋

金田一俣、浅草区聖天町三。

平塚晴雄、神田区連雀町一八

會 計

昭和六年度会費左の通り至急御納付願います。

一、地方会費年三月、一度に納付の事、

二、東京在住会員今年度前期分三月納付の事、

但し経費支辨の都合上来る六月五日迄必ず拙宅迄御送金額ひます。

尚、今朝から本年度卒業会田一郎氏が針葉樹会々計幹事に就任されました。

會計幹事 近藤恒雄